「そういやさ、日本酒の方ってどうなってる？　まだ届いてないみたいだけど」
「明日の午前中には届くってさ。選別と発注はリコがやってくれたから間違いない筈だよ」
「ならよかった。せっかく主役が誕生日に間に合うように帰って来れるってのに、肝心の祝いの酒が届かなかったらしょうがないからな」
「そういえば、そろそろ着く頃だっけ？」
「あぁ、日付が変わる前には戻れそうだって夕方頃連絡が……お、噂をすれば何とやら、だな」

シンと静まり返った夜半の廊下。
そこに小さく響く二つの声に紛れるように、階下から扉の開閉音が聞こえてくる。
和気藹々と言葉を交わしていたボノとイワンは口を止めると顔を見合わせ、玄関近くの階段まで引き返してエントランスに噂の主の姿を見留めると、タタッと階段を降りて側へと駆け寄った。
「ロマーリオ、お帰り！」
「出張お疲れ様、ロマーリオ」
「ん？　おぉ、ただいま」
この時間だから、もう皆休んでいると思っていたのだろう。
いきなり声を掛けられロマーリオは少し驚いたような顔をしたが、すぐに笑みを浮かべて挨拶を返してきた。
「留守の間ありがとうな。何か変わったことはなかったか？」
「こっちは特に何も。いつも通りだったよ」
「ロマーリオの方も問題なかったみたいでよかったな。仕事が長引いた挙げ句誕生日が潰れるなんて、災難だもんなぁ」
「いや、もう誕生日って歳でもねーし、それは構わねぇよ。今回の出張はボスかオレじゃなきゃ駄目な案件だったし、ボスはボスでやらなきゃいけねーことが山積み……」
ロマーリオはそこでふと口を噤むと、一刻置いてから二人に尋ねた。
「あぁ、そうだ、ボスはどうしてる？　夕方連絡入れた時はタイミングが悪くて話せなかったんだ。仕事は一人でも大丈夫だったと思うが……」
「ボスなら伝言聞いて、お前が帰って来る頃まで一眠りするって夕飯もそこそこに部屋に戻ったよ」
「ボス、お前の帰りをゆっくり出迎えたかったみたいで、いつもより早く仕事終わらせてたんだぜ」
「そうだったのか……なら、早いとこ顔見せてやらねーとな」
「だな。そうしてやれよ。今日なんか、待ち切れないのか朝から妙にソワソワしてたし」
「部屋に戻って一眠りしてるのも、きっと疲れてるからじゃなくて、起きて待ってると時間が経つのが長く感じられて辛いからなんじゃないかなー。あ、そうだ！」